

松江市文化財調査報告書 第118集

田中谷Ⅱ遺跡発掘調査報告書

平成20年11月

松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団

田中谷Ⅱ遺跡発掘調査報告書

平成20年11月

松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団

例　　言

1. 本書は島根県松江市西法吉町960番地2で実施した田中谷II遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は携帯電話基地局の新設事業に伴い、松江市教育委員会と財団法人松江市教育文化振興事業団が実施したもので、現地調査は平成19年6～7月にかけて財団法人松江市教育文化振興事業団埋蔵文化財課が担当した。調査面積は230m²である。正式事業名はN T T D o C o M o 松江西法吉基地局基盤新設工事に伴う田中谷II遺跡発掘調査である。
3. 調査組織は下記の通りである。

依頼者 株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ中国支社

主体者 松江市教育委員会

事務局 松江市教育委員会 教育長 福島 律子

　　〃 理事 友森 勉

　　〃 文化財課 課長 古岡 弘行

　　〃 係長 飯塚 康行

　　〃 上任 後藤 哲男

調査機関 財団法人松江市教育文化振興事業団

　　〃 理事長 松浦 正敬

　　〃 専務理事 中島 秀大（平成20年10月15日まで）

　　〃 事務局長 松浦 克司

埋蔵文化財課 課長 廣江 真二

　　課長補佐 錦織 慶樹

　　主幹 中尾 秀信

　　調査員 藤原 哲（調査担当者）

　　調査補助員 北島 和子

4. 現地調査においては、島根県教育委員会から現地指導をいただいた。

5. 調査に関しては次の方々の参加を得た（五十音順・敬称略）。

今村邦子、今村正人、上田孝子、小川真由美、小川古子、金森まゆみ、時安順子、細木清子。

6. 本書の執筆は藤原哲がおこない、北島和子がこれを補佐した。なお、第1章「調査に至る経緯」について松江市教育委員会 後藤哲男氏が執筆した。

7. 遺構番号は、遺構の種類を問わず通し番号でS-1から付したものである。

8. 本書における方位は主に磁北を、レベル値は海拔標高を示す。

9. 出土遺物実測図は1/3の縮尺図版である。

10. 本書に掲載した写真は調査員が撮影した。

11. 発掘調査で作成した図面・写真および出土遺物は松江市教育委員会が保管している。

目 次

例言

目次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 位置と環境	1
第3章 調査の成果	6
第4章 まとめ	15



第1図 松江市位置図

第1章 調査に至る経緯

株式会社エス・ティ・ディ・ドコモ中国（現エス・ティ・ディ・ドコモ中国支社）によりNTT DoCoMo松江西法吉基地局基礎新設工事が計画され、工事施行業者である株式会社熊谷組 広島支店 広島工事所を通して松江市教育委員会文化財課に対して協議があった。

計画地の東側周辺は大規模開発により住宅団地となっている。この住宅団地造成工事において、田中谷遺跡は調査されたが、計画地はこの田中谷遺跡に隣接する山林であり、緩斜面をなしている。

文化財課では計画地が未調査地であることから試掘調査が必要と判断し、平成18年7月6日から7日と同14日に試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、田中谷遺跡と同時期の住居跡などが多数検出され、田中谷遺跡との関連も予想された。遺跡名は田中谷Ⅱ遺跡とし、取扱い協議を行った。

しかし、周辺が住宅団地に造成されており携帯電話基地局としての機能を活かせる高所がないこと、現在最も活用されている通信手段である携帯電話の利便性を高める事業であることから、工事計画の変更は困難であるとの結論に達し、事前に発掘調査を実施することとなった。

調査の実施期間は平成19年6月1日から平成19年7月31日である。

第2章 位置と環境

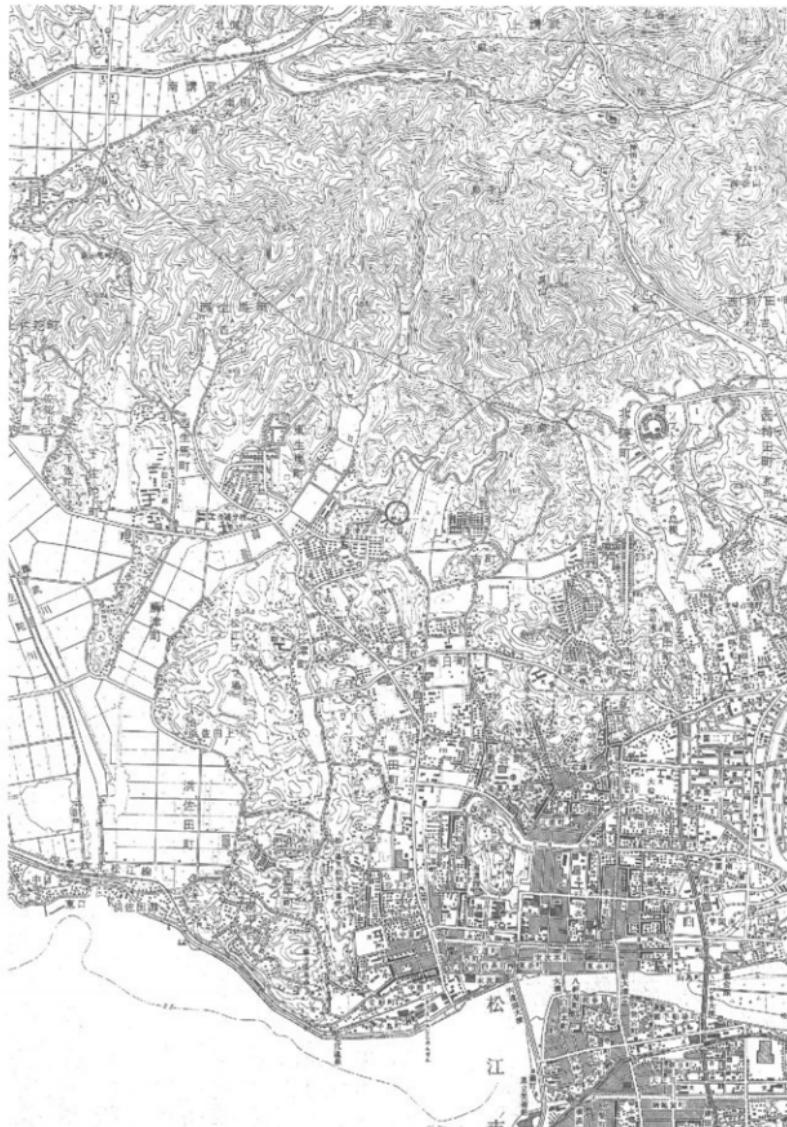
田中谷Ⅱ遺跡は島根県松江市西法吉町に所在する。遺跡地は白鹿山に連する湖北山地の末端に位置している。北、及び西には山地が続き、南西には松江市街地を形成する平野部の北端に接している。南に智者ヶ池、南西に水田が営まれていたが、周辺丘陵は比津が丘団地などの大規模開発が進み景観は一変しつつある。

周辺の湖北山地周辺には遺跡が多く、古いものでは後期旧石器が採集された白鹿谷遺跡（24）があり、法古遺跡（2）からは縄文土器が出土している。田中谷遺跡（3）からは弥生時代の旧河道や建物跡が見つかっている。

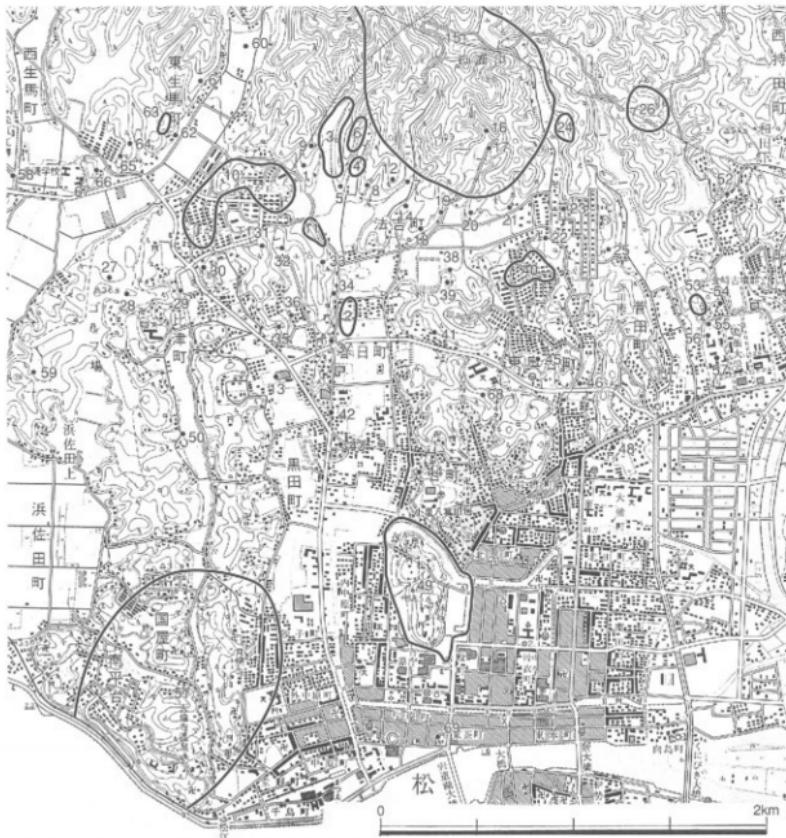
周辺の古墳は極めて多く、月廻古墳群（10）、伝字牟加比売命御陵古墳（12）、塚山古墳（5）などが知られている。平成11年～12年にかけて調査された塚山古墳（5）は辺33mの古墳時代中期の方墳で、青銅鏡や鉄製武器、武具など豊富な副葬品が出土されている。

歴史時代の奈良・平安時代においては田中谷遺跡（3）、下がり松遺跡（4）、久米遺跡（32）などで掘立柱建物跡や加工段などが検出している。

中世では白鹿谷城砦群（15）が築かれている。また角谷遺跡（6）からは大規模な盛土によって築かれた土橋が検出されている。土橋の明確な時期や性格は不明であるが、通路として築かれたものが山城に取り囲まれた可能性も指摘されるところである。

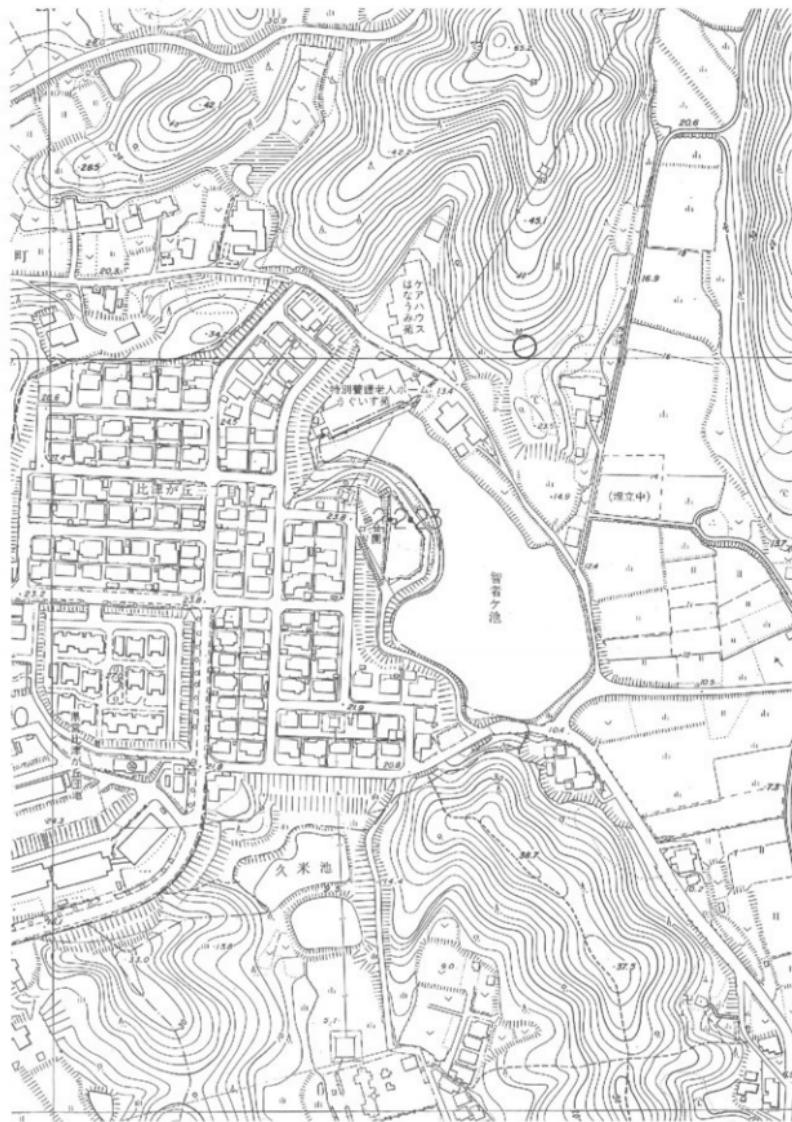


第2図 遺跡位置図

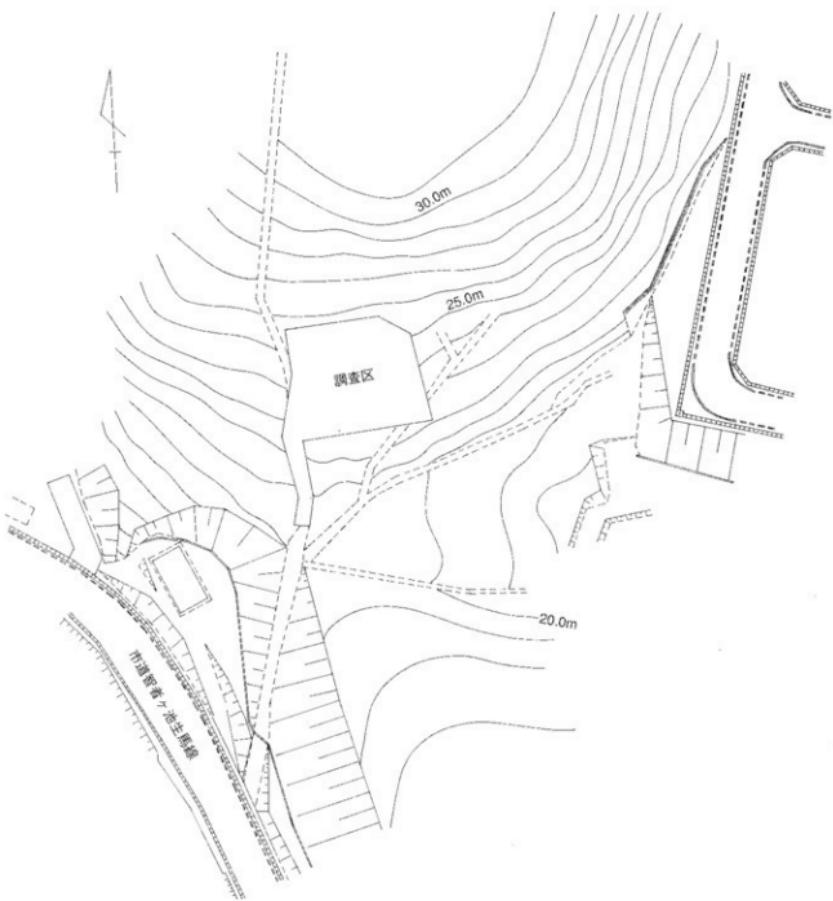


No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	田中谷II遺跡	19	山腹古墳群	37	中代遺跡	55	小丸山古墳
2	法吉遺跡	20	長谷談神古墳	38	栗元古墳	56	音田丘古墳
3	田中谷遺跡	21	瀧谷荒神古墳	39	栗元横穴墓群	57	粟前山古墳
4	下が砂遺跡	22	岡田柔師古墳	40	折妻古墳群	58	名尾丘古墳
5	塙山古墳	23	二反田古墳	41	煙硝倉古墳	59	廣瀬殿山城跡
6	角谷遺跡	24	白鹿谷遺跡	42	法吉小学校裏山横穴墓群	60	平野前廢寺
7	鶯谷遺跡	25	松ヶ岬古墳	43	摩利支天山横穴墓群	61	法恩寺瓦窯跡
8	新宮古墳	26	藤ヶ谷古墳跡	44	赤山横穴墓群	62	桜木古墳
9	田中谷古墳	27	ゴルフ場内古墳群	45	(ひのさん)山横穴墓群	63	桜木古墳群
10	月削古墳群	28	ゴルフ場内横穴墓群	46	塙崎横穴墓	64	山王古墳
11	久米古墳群	29	木的崎横穴墓群	47	切通横穴墓	65	山玉神社跡
12	延宇奉加比禿命御陵古墳	30	ひくぐだ横穴墓	48	赤崎横穴墓	66	井原古墳
13	春日遺跡	31	久米第2横穴墓群	49	松江城	67	かいつき山古墳群
14	吉岡兵之助宅前古墳	32	久米遺跡	50	小丸山古墳	68	万寿寺裏山古墳
15	白鹿山城跡群	33	唐梅古墳群	51	荒岡城跡	69	茶町古墳
16	長谷墓跡推定地	34	石在経塚	52	深町古墳群		
17	ココメダカ山遺跡	35	比津が崎横穴墓群	53	著田ヶ丘古墳群		
18	山横経塚群	36	久米横穴墓群	54	宮田古墳群		

第3図 周辺の遺跡分布図



第4図 調査区位置図



第5図 調査区位置図

第3章 調査の成果

基本層序

遺跡地周辺には大規模開発による住宅団地が存在するが、本調査地は丘陵斜面部分の傾斜地に位置し、現状では山林であった。地山は黄褐色の粘性土で、表土直下～GL-30cm前後の極めて浅い深度で地山の黄褐色土が検出された。遺構はこの地山面で全て検出したが、いずれも極めて浅いものが多数を占めていた。

調査終了後、地山面を想定した黄褐色土の粘性土を少し掘り下げたが上層は変わらず、遺構・遺物ともに検出しなかったので調査を終了した。

調査の概要

調査地点は地形的には丘陵端部の傾斜部で現状は山林であった。調査面積は携帯電話基地局の鉄塔建設部分と重機の進入路箇所の計230m²である。調査地では試掘調査の結果、表土直下から遺構が検出されていたため、表土直下から人力にて調査を実施した。

調査区北・中央側の一部で表土下に浅い黄褐色の層が認められ、微量ではあるが遺物（須恵器）も混入していた。そのため、これを包含層とし、よりしっかりと固く締まった黄褐色の粘性土（地山面）まで掘り下げ、遺構を検出した。一方、調査地南端の部分では表土直下から多量の遺物が検出されたため、あまり掘り下げずに表土直下から遺構・遺物の検出に努めた。

その結果、傾斜地の上側（調査地北・中央）ではピット類を中心に、傾斜地の下側（調査地南側）では浅い土坑状の遺構を検出した。

調査の結果、ピット類の埋土には炭や焼土が多く混入していたものもあり、また若干の遺物を含んだものもあったが、建物跡などを復元できるような計画性のある配列は確認できなかった。

傾斜地の下側（調査地南側）の土坑類は埋土が灰色土で出土遺物も多かった。これらは試掘時に検出され、住居跡？と考えられていたものであったが、遺構の埋土には炭や焼土が多数見られたので、当初、工房等の遺構を想定した。

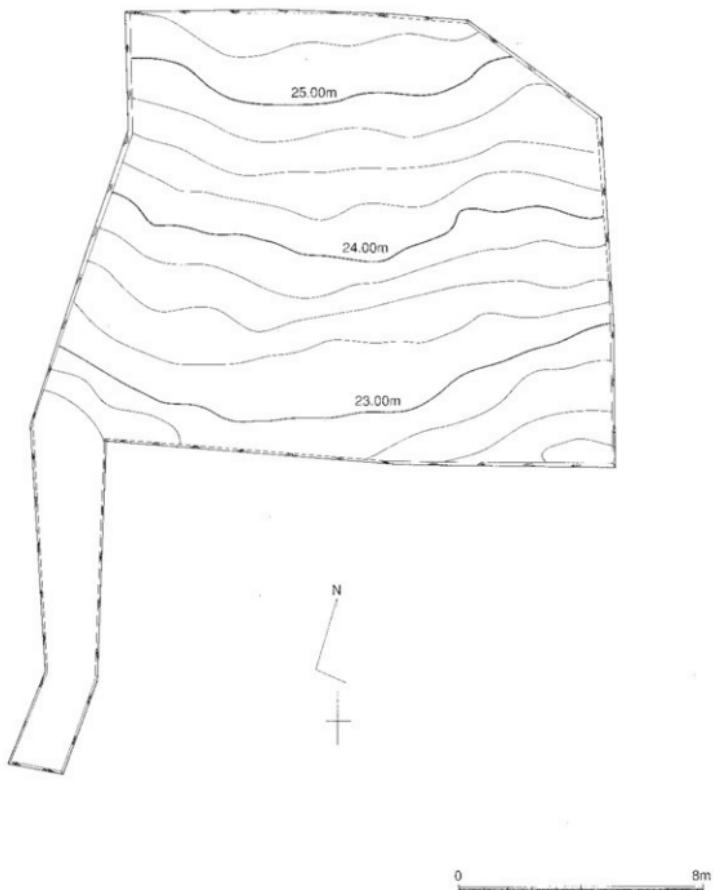
発掘調査の結果では、遺構の深さは10cm前後と浅いものばかりであり、また、地形に沿って東西に細長く認められることから、加工段としての性格が考えられる。しかし具体的には積極的に住居や工房とするような明確な痕跡は認めることが出来なかった。

以下、主要な遺構と遺物について詳細を記す。

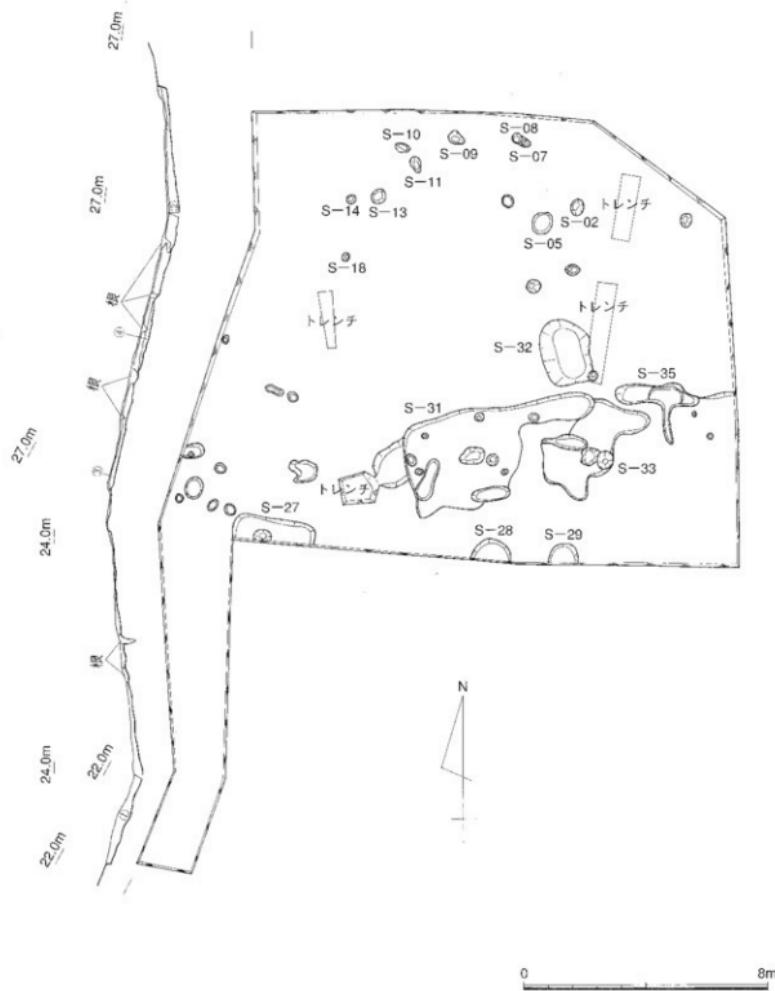
ピット S-5

調査区中央北側で検出された浅いピットで径65cm、深さ12cmを測る。埋土は暗褐色シルトの単層で須恵器片が出土している。実測した（1）は須恵器の环底部、復元底径は8.0cm、薄手で底部に回転糸切り痕が残る。

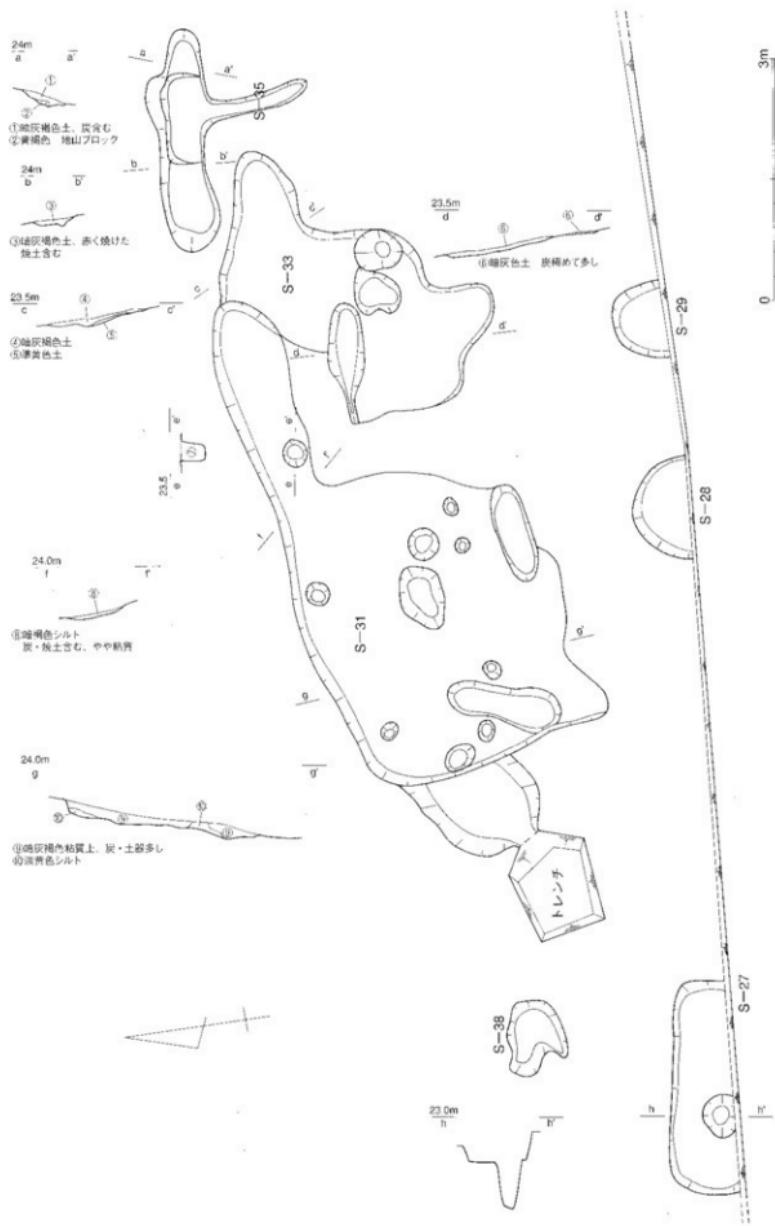
S-5は炭を含んでいなかったが、周辺の調査区北側のピット、S-2、S-7、S-8、S-9、S-



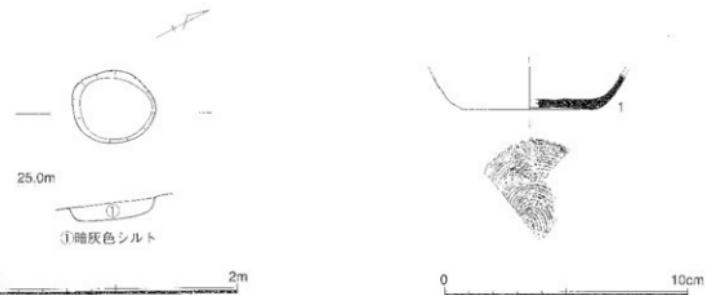
第6図 等高線図（調査後）(S=1/160)



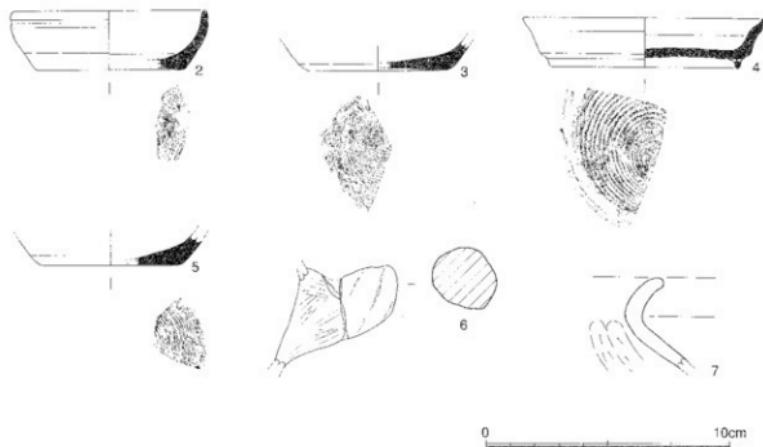
第7図 田中谷II遺跡 遺構配置図 (S=1/160)



第8図 加工段周辺遭構実測図



第9図 S-05遺構 出土遺物実測図



第10図 S-27出土遺物

11、S-13、S-14などのピットは、何れも浅く、遺物を含んでいなかったものの埋土に炭を含んでいたことは注意しなければならない。

土坑 S-27

調査区南隅で検出した上坑で長軸262cmを測る。調査区南端の検出で遺構は南の調査区外へと延びる。中央西よりに径52cmのピット状の落ち込みがあり、土坑の検出深度は20cmと浅いが、ピット状の落ち込み部分を含めると、最大検出深度は68cmを測る。

遺物は比較的出土しており実測できたのは(2)～(7)の6点である。(2)は須恵器の塊、15%程度が残存する小片である。復元口径13.4cm、復元底径10.3cmを測る。口縁部分に太い沈線状のくびれが見られるが、器高は3.6cmと低い。(3)は須恵器の底部片である、復元底径は8.6cmで回転糸切り痕が残る。(4)は須恵器の皿で30%残存する。復元口径は14.3cm、復元底径は11.4cm、器高3cmを測る。底部の切り離しは回転糸りで貼付けの高台を付す。(5)は須恵器の底部小片で糸切り痕が残る。(6)は土師器の取手片で残長6.8cm、厚み3.8cmを測る。(6)は土師器の甌片、小片で内面にケズリ痕が残る。

ピット S-28・S-29

調査区南端のピットで、S-28は径12.2cm、深さ7cm。S-29は径9.8cm、深さ18cmを測る。いずれも南半分は調査区外へと伸びており、遺構の半分を検出した状態である。S-28は須恵器の甌片1点が出土したが細片のため実測できなかった。S-29は遺物が出土しなかった。

自然の落ち込み S-32

調査区中央東よりに位置する。試掘時のトレンチでも部分的に検出されており、当初は住居等の遺構を想定した。しかし全面発掘の結果、長軸220cm、短軸170cm、深さ70cmの落込みで、その規模に関わらず埋土は単層（赤褐色よくしまったシルト層）で、遺物も全く含んでいなかった。完掘結果の所見では遺構でないと判断するものである。

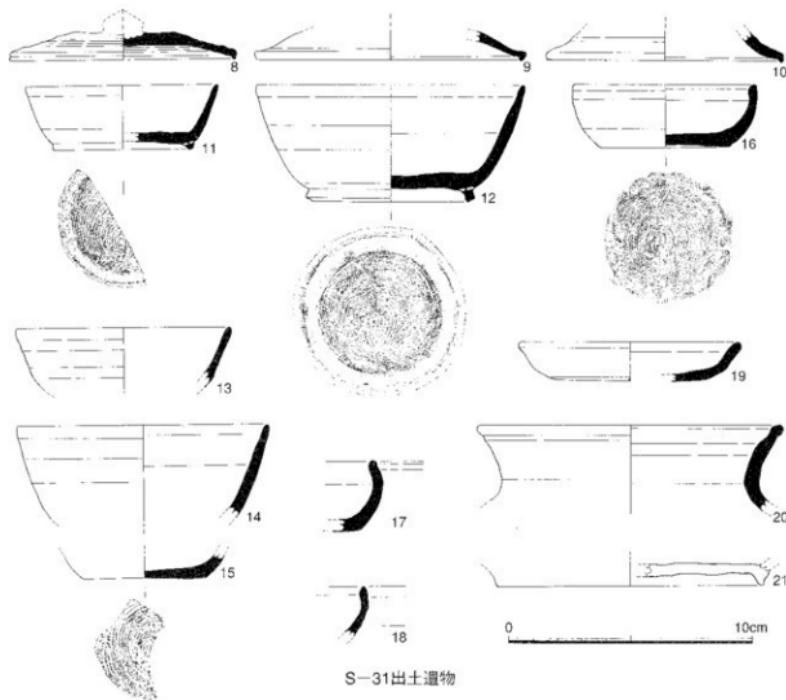
加工段 S-31・S-33・S-35

調査区南部の加工段である。検出時は異なる遺構番号で作図や遺物取り上げを行ったが、わずかな平坦面に沿って細長く連なって伸びており、遺物もほぼ同形態のもので占められているため、本来は一連の加工段であったと考えられる。残存部分から想定すると、南北350cm、東西950cm以上の規模であったと考えられる。表上直下で検出したが、検出段階での平面形は不定形で、深度も最大で10cmと極めて浅かった。浅い遺構の底面からピット状の遺構も検出されたが、大部分が削平されたためか、明確な建物プランは認められなかった。削平されたと思われるものの、本調査区での出土遺物の9割はこの加工段周辺から出土しており、埋土には炭や焼土が多数含まれていた。

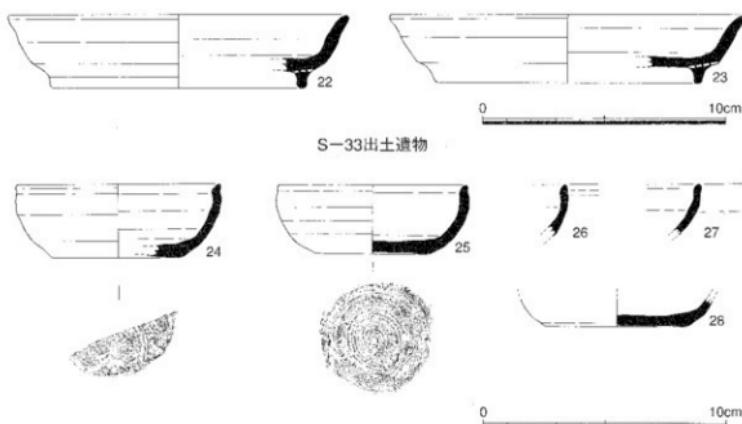
出土遺物は(8)～(28)でほぼ全て須恵器で占められていた。このうち、(8)～(21)が加工段のうちの西側(S-31)から出土しており、(22)、(23)が中央(S-33)、(24)～(28)が東側(S-35)から出土している。先述したように出土地点は異なるが、遺物組成はほぼ同一で、本来は一体の加工段と考えてよいであろう。

(8)～(10)は須恵器の坏蓋である。復元口径は13～16cm程度で、何れも端部は面を有する。つまみ部分は残存しないが宝珠形のつまみを付していたものと想定される。

(11)～(14)は坏である。(11)は50%残存、復元口径は11.8cm、器高は4.1cmを測る。口縁は直線的に伸び高台を貼り付ける。底部の切り離しは回転糸切り後未調整である。(12)は70%ほど残存、(11)より大型の坏で口径15.8cm、高台径は10.2cmを測る。底部は回転糸切により切り離し、高台を貼り付ける。(13)と(14)は坏の口縁の小片である。



S-31出土遺物



S-35出土遺物

第11図

(15)～(18)は須恵器の塊、又は坏で(15)は底部のみの小片、回転糸切痕が残る。(16)はほぼ完形、口径は10.9cm、底径7.6cm、径の割合に比して器高は低く、3.9cm、口縁のくびれもほとんど見られない、底部の切離しは回転糸切りによる。(17)、(18)は同形の塊の小片である。

(19)は40%ほど残存の皿、復元口径は13.2cm、器高は2.4cmを測る。無高台の皿で焼成は不良である。

(20)は須恵器の甕の口縁部分、(21)は皿と思われる高台部分の小片で、焼成は軟質でぶい褐色を呈する、上師質と思われる。

(22)、(23)は須恵器の皿で何れも小片であるが、復元口径は20cmを超える大型品である。

(24)～(28)は須恵器の塊、もしくは坏で、(24)と(25)は30～40%残存、何れも復元口径12.3cm、器高4.2cm内外を測り、回転糸切りにより切り離されている。(26)、(27)も同形の塊の極小片である。(36)は底部片で風化が著しい。

包含層出土遺物

遺構以外では包含層から遺物が出土している。概ね加工段(S-31、33、35)周辺から出土しており、大部分は加工段等に関連するものと考えられる。出土遺物の形態や時期なども加工段からの出土遺物と同質である。このうち(29)～(47)は須恵器、(48)は土師器、(49)は粘土塊、(50)は瓦である。

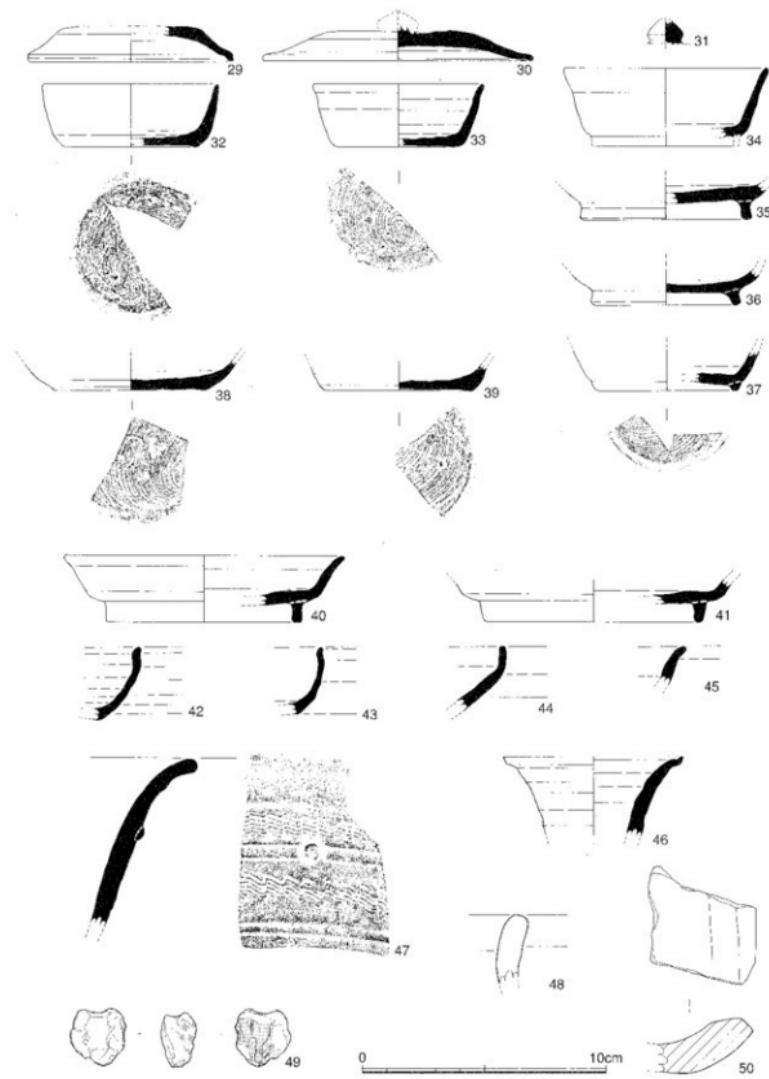
(29)～(31)は須恵器の坏蓋で宝珠つまみ(31)やかえりのつかない蓋(29)、(30)である。(32)～(39)は須恵器の坏、または塊である。(32)は40%残存、口縁は直線的に立ち上がり、底部は回転糸切りで切り離されている。被灰がひどく調整が不明瞭である。(33)は40パーセント残存、復元口径は10.4cm、器高は3.9cmを測る。焼成は良好で重ね焼きの痕跡が残る、底部の切離しは回転糸切である。(34)は小片、復元口径は12.4cm、器高は4.4cmを測る。焼成は甘く内外面とも橙色を呈している。

(35)～(39)は底部片で小さな高台が付く(35)、(36)や、無高台の(38)、(39)がある。(40)、(41)は須恵器の皿である。何れも破片であるが、復元高台径は11～12cm内外を測る。(42)～(45)は須恵器の坏、又は塊の口縁部の小片である。

(46)は蓋の口縁部分か、小片で全体像が不明瞭である。(47)は大甕の口縁片で浮文や波状文で飾られている。

(48)は土師器の甕の小片、(49)は長軸3.5cm、短軸3.2cmを測る粘土塊で南側(加工段)周辺の表上から出土している。焼けているためか、黒色に変色している箇所が見られる(図版のスクリーントーン部分)。(50)は平瓦で残存長軸は6.2cm、短軸は5.4cmを測る。短部を面取りしているようで平坦に仕上げている。

以上、出土遺物は全体的に8世紀末～9世紀代の須恵器坏・蓋・皿・甕などが大半であり、検出した遺構も大部分は同時期のものであると考えられる。その他では極めて磨耗した弥生土器片が数点検出されたが、石器・鉄器類は全く検出していない。



第12図 遺構外・包含層出土遺物
(49の網掛け部分は黒色度色部分)

第4章 まとめ

田中谷Ⅱ遺跡のすぐ東側には田中谷遺跡が存しており、島根県教育委員会や松江市教育委員会（調査機関：松江市教育文化振興事業団）により発掘調査が行われている。その結果、弥生時代～古代に至る集落跡が確認されている。本遺跡地の遺物は大部分が8世紀末～9世紀代のもので占められており、該当時期において丘陵斜面で加工段などを作っていたことがわかる。

出土遺物は須恵器類がほとんどで、煮炊きで使用するような土師器類が極めて少ないと、集落としては近隣の田中谷遺跡が想定されるため、本遺跡の加工段は生活跡、というよりは極めて簡単な作業などを実施したものではなかったかと考えられる。

明確な作業を示すような遺物はなく、須恵器片以外の遺物では唯一、粘土塊を一つ検出したものの、詳細は不明である。ただし、調査区内で検出した加工段やピットの埋土からは焼土や炭などが検出されることが多かったことは注意しなければならないであろう。

何れにせよ、田中谷Ⅱ遺跡の調査は極めて狭い範囲の調査地であるが、近隣における既往調査成果などを含めると、より具体的な古代の生活が明らかになっていくものと考えられる。そのため、こうした小さな調査データも積極的に積み重ねていることが非常に重要であろう。

参考文献

松江市教育委員会・㈱松江市教育文化振興事業団2001『田中谷遺跡Ⅲ区発掘調査報告書』

島根県教育委員会2002『田中谷遺跡・塚山古墳・下がり松遺跡・角谷遺跡』

写 真 図 版



調査前風景（南側より）



完掘状況（北側より）



土層堆積状況（東側より）

図版2



加工段遺物出土状況



同上



加工段炭検出状況



加工段S-31検出状況
(西側より)



加工段S-31完掘状況
(東側より)



加工段S-31・S-32
・S-33・S-34
(西側より)

図版4



S-35 (南側より)



S-33 (南側より)



S-05 (南側より)



図版6



出土遺物 1



13



14



15



16



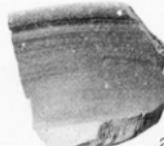
17



18



19



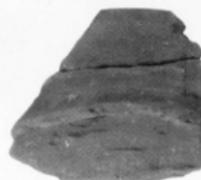
20



21



22



23



24

図版8



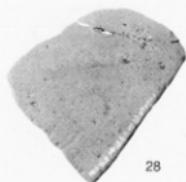
25



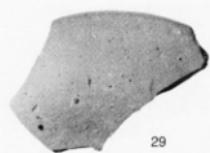
26



27



28



29



30



31



32



33



34



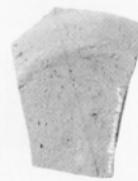
35



36

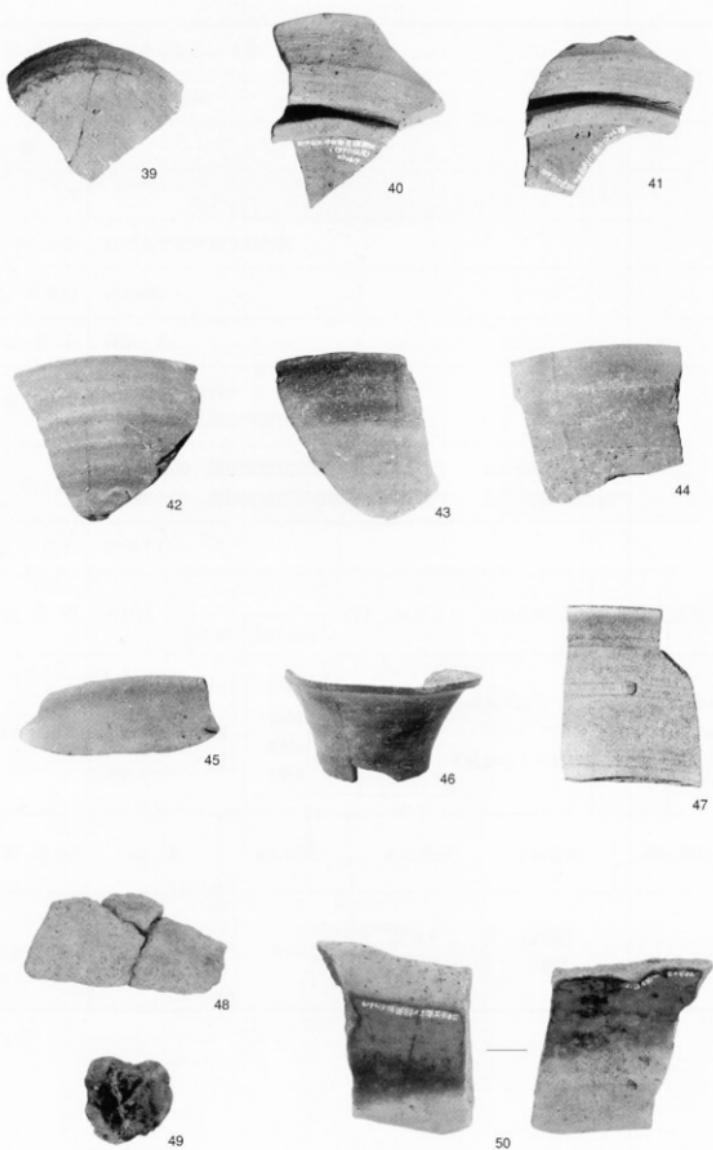


37



38

出土遺物 3



出土遺物 4

報告書抄録

ふりがな	たなかだににいせき							
書名	田中谷Ⅱ遺跡							
副書名								
卷次								
シリーズ名	松江市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第118集							
編著者名	藤原 哲							
編集機関	松江市教育委員会 財団法人松江市教育文化振興事業団							
所在地	〒690-8540 島根県松江市末次町86番地			TEL: 0852-55-5284				
	〒690-0401 島根県松江市島根町加賀1263-1			TEL: 0852-85-9210				
発行年月日	2008年11月							
所 収 遺 跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
田中谷Ⅱ遺跡	島根県 松江市 西法吉町 960番地2	市No. K-66 県No. 1049	32201	35° 29' 33"	133° 2' 47"	平成19年6月1日 ～ 平成19年7月31日	230m ²	携帯電話 基地局 建設工事
所 収 遺 跡	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
田中谷Ⅱ遺跡	散布地	平安	ピット 上坑	須恵器 土師器				

田中谷Ⅱ遺跡

平成20(2008)年11月

発行 松江市教育委員会
島根県松江市末次町86番地

財團法人松江市教育文化振興事業団
島根県松江市島根町加賀1263-1

印刷 ㈱谷口印刷
島根県松江市東長汀町902-59